

お願

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

白い花が好きだ

昭和51年6月15日 初版発行

昭和51年11月1日 7版発行

著 者 新 田 次 郎

発 行 者 小 保 方 宇 三 郎

印 刷 者 堀 内 文 治 郎

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀 内 印 刷

発 行 所

東京都文京区音羽2
版替 東京 115347

株式会社
電話

光 文 社
東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

(復本製本)

© Jirō Nitta 1976

(分)0-0-95(製)92010(出)2271 (0)

Printed in Japan

白
い
花
が
好
き
だ

新^に
田^た
次^じ
郎^{ろう}

装幀
栃折久美子
本文カット
生澤朗

こぶしの章——わたしと歴史——

武田信玄

二人の武将

天、味方せず馬場信春

長篠城址に立ちて

八丈島流人略史

ピッケルの章——わたしと山——

小説富士山頂のモデル

初登攀

富士山に賭けた時代

富士山の美

富嶽三十六景

100 98 91 88 82 81 66 62 56 46 8 7

もうひとつの原因

長田君の遭難

予感

幻想の山柿

やまがき

ばかばかしい遭難

山日記を開くまで

生きた気象学

足跡

失恋と山登り

郷愁の八ヶ岳

ともしびの章——わたしと人生——

限界における祈り

心と心の間隙かんげき

167

好きなものを作りました

170

信濃しなのの女

178

芙蓉ふようの人のような女ひと

185

書架の章——わたしと文学——

195

八甲田山死はっこうださんの彷徨ほうこう

196

『怒る富士』について

217

『アラスカ物語』のフランク安田の娘さん

220

野戦の剣法

225

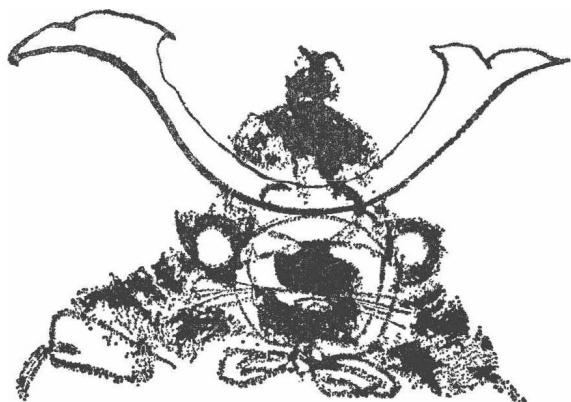
私の文章作法

228

ひとり一生一作

230

こぶしの章
——わたしと歴史——



武田信玄

父との対立

晴信（のちの武田信玄）の生まれたのは大永元年（一五二一）十一月三日で、この日父武田信虎は駿河（静岡県）の今川氏親の部将福島正成の率いる一万五千の大軍を相手に苦戦の最中だった。

敵は富士川沿いの河内路を北上しながら次々と武田方の城を落とし、この日は古府中（現在の甲府市）の西方約二里（約八キロ）の登美の竜地台（山梨県北巨摩郡双葉町）にまで達していた。当時はまだ鉄砲伝来のまえだから、鉄砲の音こそ聞こえなかったが、敵の大軍を目の前にひかえての古府中の人々の動揺はたいへんなものだった。信虎の正室大井氏はこの騒ぎのなかを要害山の麓にある積翠寺に難を避けて、ここで太郎晴信を生んだのである。

「男子誕生、母子とも健全」という報が、陣中の信虎のもとに届くと、信虎をはじめ武田の将兵

は武田家の世嗣の誕生を喜びあい、

「これこそ武田家繁栄の瑞兆でなくてなんであろう。われらは勝つのだ、敵を滅ぼすのだ。」

と、互いに手を取りあつて誓ひあつた。不思議なもので、その日まで押されに押されていた武田軍が、急に元氣を取りもどして、あちこちで福島軍を打ち破り、十一月二十三日の上条河原（山梨県中巨摩郡敷島町）での合戦では、俄然武田軍が優勢に転じ、敵の大將福島正成以下六百人を討ち取つたのである。負傷者は四千人もいたということである。この大勝利によって、武田信虎の名は近隣に聞こえるようになり、甲斐（山梨県）を従えようと考えていた今川氏親の夢は絶たれたのであつた。

晴信はじつに危機一髪ともいうべきときに生まれたのであつた。

晴信の生まれたころは、戦国時代の真つ最中で、日本中に大小無数の豪族が、それぞれ武力をたくわえながら自分の土地を守り、すきあれば近隣を斬り従えて勢力拡大をはかろうとしていた。甲斐国は古来から、源氏の流れをくむ武田家にゆかりがある一族が支配していたのだが、同じ武田家の内部で証争が連続し、主流派ができれば反主流派が生じ、反主流派が勢力を得ると、そのなかにまた反抗するものが出るといったぐあいだで、甲斐の国人（豪族）が互いに争つてゆづらなかつた。

信虎はその戦乱のなかに生まれ、甲斐国を統一せんがための戦いに明け暮れるような毎日を送っていたのである。だれが敵やら味方やらわからないような混沌としたなかから、しだいに武力を増強して、国内反対勢力を屈伏せしめていくのはたいへんなことだった。

そのような状態のときに、駿河の今川氏親の部將福島正成の甲斐侵略戦争がおこつたのである。

それまでは国境近くの攻めあいや取りあいだったのが、甲斐国の中心部まで敵が侵入するという事態に立ち至って、はじめて、甲斐在住の国人たちは力を武田信虎に貸し、そしてみごとに敵を掃討したのである。信虎の実力は評価され、信虎はこの一戦によって、甲斐を統一した。このときを境として、甲斐は武田信虎をもって代表されるようになった。

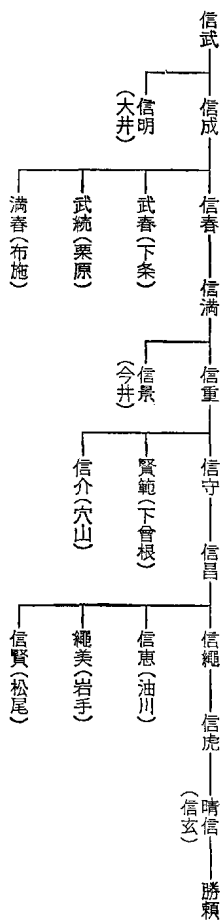
信虎は、甲斐国の領国支配が成ると、目を関東に向けた。彼は相模（神奈川県）の北条氏綱に攻められて氣息奄々^{えんえん}としている上杉朝興^{うえさぎともおき}と結んだ。これによって、北条氏を敵とすることになった。武田軍は甲・相国境でしばしば北条軍と戦った。北条との仲が悪くなったばかりでなく、信虎は今川氏輝^{いまがわうじてる}（氏親の子）とも仲違いをした。信虎の軍は富士川沿いに駿河へ馬を入れることが再三であった。

信虎は、領国統一の方策として、遠征を考えていたのである。甲斐国の人々の目を関東や駿河に向けることによって、自国内の反信虎勢力台頭をおさえようとしたのである。これは現代においても、諸外国のみならず日本国内においても、政略としてよく扱われている手である。

だが甲斐の人々はたび重なる出兵と重税にあえいでいた。当時の戦争は、原則として食糧は自前持ちであった。糲食^{びやくしょく}（ほしいいいが用いられた）・蕎麦粉^{そばこ}・黍粉^{きびこ}・塩が携帯食糧のおもなるもので、せいぜいひとりが持てる量は半月ぐらいのものであった。信玄の時代になると荷駄隊が編成された。これはいままでいうところの輜重部隊^{しじゅうぶたい}であり、弾薬や食糧を専門に輸送する部隊であったが、信虎の時代には、各自が食糧を持参しての出征だったからたいへんだった。

働き盛りのものが戦場に駆りだされると農事がおくれる。負傷したり、戦死した場合のことを考えると、家人の心は穏やかではなかった。

武田氏略系図



一般大衆の戦争に対する忌避感情が、それらの大衆を支配している部将に影響し、これが信虎の政策批判になって現われたのは、天文五年（一五三六）のことであった。

信虎は、今川義元（今川氏輝が早死したのでそのあとを継いだ。氏輝の実弟）に反乱を企てたがため、甲斐に逃げこんできた前島一門を捕え、彼らに切腹させ、その首を今川義元へ送った。前島らは以前から武田と心安くしていたものたちである。このような場合は、いちおうかくまっておき、機をみて今川家とかけあって命乞いをしてやるべきところを、部将や奉行衆の意見を聞かずに信虎がこのような処置をとったのは、今川義元の歛心を買うためであったが、このやり方に不満をもつ奉行衆は、そろって辞表を出して国外に走ったのである。

信虎の独裁主義に対する家臣の反抗が、このような形で爆発したにもかかわらず、信虎はいよいよ、ひとりよがりの性格をむき出しにした。

信虎は関東の上杉朝興（武蔵河越城）の娘を晴信の正室として迎えた。晴信が十三歳、朝興の娘

もまた十三歳の少女であった。少女は翌年妊娠したが、その子を生むことができずに母子ともに死んだ。

当時は早婚であった。女は初潮があれば一人前とみなされた。このふたりの政略結婚は、まことにあわれであった。

信虎は晴信のために京都から左大臣（さだいじん）・轉法輪（てんぽりん）・三条公頼の娘を迎えた。晴信が十六歳の年であった。三条氏の娘は晴信より年上だった。公卿（くきょう）の娘をもらっておけば、朝廷に取り入るのになにかと都合がよいだろうと考えたからであった。

この三条氏の娘は天文七年（あまのとしのね）嫡子太郎義信を生んだ。晴信は十八歳で父となった。

信虎は相模の北条氏と争ったり、駿河の今川氏と争うのがあまり効果的ではないことを知ると、領土侵略の野望を信濃（しんのう）（長野県）に向けた。信濃は山に囲まれ、そのなかの谷と盆地にそれぞれ豪族が住んでいた。信虎はそれらの豪族を斬り従え、信濃一国を支配下においたら強大な戦力になるだろうと考えた。信濃の諏訪と佐久地方が当面の攻撃目標となった。

休みなく戦争がつづき、容赦なく税金を取り立てられる民衆の信虎に対する怨嗟（えんさ）の声は、いよいよはげしくなった。これと歩調を合わせるように、信虎の狂暴なふるまいがつづいた。信虎は好色家であった。家臣の反対を押し切って、美人の噂が高かった関東の山内上杉憲房（やまのうちにさすけのりふさ）の後室（未亡人）を奪って側室にしたり、部下の娘を無理矢理に側室に迎えたり、野郎（のやう）けで見そめた女を強引に求めたりした。家臣が諫言（かんげん）すると、だれかれの見境なく手打ちにした。

信虎が嫡子太郎晴信をきらって、次男の信繁（のぶしげ）をかわいがるようになったのはこのころであった。なにかにつけて、晴信をばかもの扱いにし、信繁をほめた。

「武田を継ぐものはこの信繁だ。」

などと、家臣の前ではっきり言うこともあった。家臣たちは眉をひそめた。そのころすでに晴信は聡明な頭腦の持ち主であり、なかなかよくできた人間であることが家臣たちに知れ渡っていた。もし、信虎が長男の晴信をうとんじて、次男の信繁に家督を譲るようなことになれば、せっかくひとつにまとまった武田のなかに、再び争いがおこることはまちがいないことだった。そのようなことは絶対に避けるべきだというのが、おもなる家臣たちの意見だった。

重臣たちはひそかに寄り合い信虎を追放して、晴信を武田の頭領に迎えようという相談をはじめた。

天文十年（一五四一）六月、信虎は大軍を率いて、信濃の佐久・小県方面に勢力を張っている海野棟綱を攻めて大勝した。余勢を駆って付近の豪族を平定して、凱旋の途についた。葦崎のあたりまで来て一息入れているとき、重臣の板垣信方と甘利虎泰が信虎の本陣にそろってやってきた。「今川殿からの迎えの輿が外で待っております。どうぞお乗りくださいますように。」

信虎にとっては寝耳に水だった。

「なんのために今川殿から迎えの輿がきたのだ。」

「本日をもって、武田家の頭領は晴信様になりました。信虎様はひとまず、駿河の隠居所で御静養遊ばされますように。」

板垣信方が言った。言にくいことを言わねばならない苦悩に満ちた顔だった。

「な、なんと、そなたらは反乱を企てたのだな、おのれ！」

と刀に手を掛けようとする、甘利虎泰が飛びかかってその手をおさえて言った。

「もはや、信虎様にお味方申すものは、甲斐中を捜してもひとりもおりません。お生命を大事にされるおつもりならば、このような物に手を掛けないほうがよろしいかと存じます。」

信虎は太刀を取り上げられて輿に乗せられた。じつにじょうずにしくまれた無血革命だった。信虎追放については、今川義元とも打ち合わせがすんでいたのがあった。信虎は駿河に追われ、その後、京都に移り、信玄の死後、故郷が恋しくなつて帰つてきたが、古府中にはいることができず、伊那の高遠（上伊那郡高遠町）で死んだ。

従来、晴信は、父を追放してその国を奪つた大悪人のようにしばしばいわれてきたが、それはうそで、信虎は家臣団によつて追放されたのである。家臣団に擁立されて武田の頭領となつた晴信は、そのとき二十一歳だった。

晴信の富国策^さ牙^さえる

晴信は家臣団におされて武田の頭領になつたのだから、家臣団の言うことをよく聞いた。独断専行はせずに、合議制でことを進めていく方針をとつた。

武田の軍議（作戦會議）は、晴信の代になつて確立した。軍議の舵^かをとるのは晴信自身であり、議論が割れた場合、最後の決をとるのは晴信であつた。

晴信は父信虎の信濃侵略戦争をそのまま推進した。が、父信虎のようにがむしゃらに攻めることはせず、調略によつて、敵の内部をがたがたにしてからはじめて攻撃するという策をとつた。

調略とは、敵の内部のこの人はと思うような人物に、ひそかに誘いの手を伸ばして、味方につけ

ておき、いざ城攻めがはじまったとき、城内で反乱をおこさせて城を手に入れる方法だった。城内で反乱をおこさないでも、戦わずして逃げてもいいし、城主にこの戦いはどうい勝負かがないから降参したほうがよいでしょうとすすめてもいい。血を流さずに勝つのなら、少々時間がかかっても調略こそもっとも優れた侵略の手段だった。

晴信は真つ先に隣国の諏訪氏を滅ぼした。諏訪頼重（高島城主）を切腹させて、その娘の湖衣姫を側室にした。湖衣姫は世にもまれなる麗人で、武田勝頼の母となった女である。またほとんど同じころ、小県の豪族禰津元直の娘里美を側室に迎えた。湖衣姫にしろ里美にしろ、いわゆる政略結婚ではなく、晴信がみずから求めて側室に迎えた女であった。晴信が男性としての愛情をそそいだのは、父信虎におしつけられた正室の三条氏ではなく、このふたりの側室と、その後迎えた側室油川氏の息女恵理の方の三人であった。

相次いで美しい側室を迎えた当時の晴信は、精神的にも肉体的にも充実していた。晴信が甲州法度を制定したのは、天文十六年（一五四七）、晴信二十七歳のときである。

甲州法度ということばをひらたくいえば、武田法令集である。

だれにもわかるように書いたものであった。その一例をとると、

「洪水のとき、上流から材木が流れてきたとき、それが橋がこわれたものであったら、拾い上げてもとに返さなければならぬ。それ以外のものは拾ってもよい。」

という一条があった。公私をはっきりさせたものである。晴信は甲州法度を制定し、その最後に、

「もし晴信自身がこの法度にふれるようなことがあったら、遠慮なく上申してもらいたい。誤り